

2019年横浜ナザレン教会降誕節第十主日礼拝  
「主と共に働く」ルカ福音書 9:7～17

【聖書】

ルカ 9:7 ところで、領主ヘロデは、これらの出来事をすべて聞いて戸惑った。というのは、イエスについて、「ヨハネが死者の中から生き返ったのだ」と言う人もいれば、8「エリヤが現れたのだ」と言う人もいて、更に、「だれか昔の預言者が生き返ったのだ」と言う人もいたからである。9しかし、ヘロデは言った。「ヨハネなら、わたしが首をはねた。いったい、何者だろう。耳に入ってくるこんなうわさの主は。」そして、イエスに会ってみたいと思った。

10 使徒たちは帰って来て、自分たちの行ったことをみなイエスに告げた。イエスは彼らを連れ、自分たちだけでベトサイダという町に退かれた。

11 群衆はそのことを知ってイエスの後を追った。イエスはこの人々を迎え、神の国について語り、治療の必要な人々をいやしておられた。12 日が傾きかけたので、十二人はそばに来てイエスに言った。「群衆を解散させてください。そうすれば、周りの村や里へ行って宿をとり、食べ物を見つけるでしょう。わたしたちはこんな人里離れた所にいるのです。」13しかし、イエスは言われた。「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい。」彼らは言った。「わたしたちにはパン五つと魚二匹しかありません、このすべての人々のために、わたしたちが食べ物を買に行かないかぎり。」14というのは、男が五千人ほどいたからである。イエスは弟子たちに、「人々を五十人ぐらいつ組にして座らせなさい」と言われた。15 弟子たちは、そのようにして皆を座らせた。16 すると、イエスは五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで、それらのために賛美の祈りを唱え、裂いて弟子たちに渡しては群衆に配らせた。17 すべての人が食べて満腹した。そして、残ったパンの屑を集めると、十二籠もあった。

1 奇跡物語の意味

今日は主イエスが僅かな食糧で5000人を満腹にした奇跡のお話です。科学の発展した現代に生きる私たちは勘違いしがちですが、聖書テキストは科学記事ではありません。どのようにして、この不思議な現象が起こったのか？を考えても、答えは得られません。聖書に記された奇跡は、イエス・キリストは、どのようなお方であるかを私たちが知るためのものです。奇跡の種明かしをしたり、奇跡を否定することよりも、私たちが主イエスについて、そして主の父なる神について知ることの方がはるかに重要なことです。

2 テーマは神の国

さてルカによる福音書の大きなテーマは、神の国です。使徒達がイエス様に遣わされて、イエス様の代理としてほうぼうを巡り歩き、宣べ伝えたのは、神の国でありました。今日の聖書テキストでも、主を追ってきた群衆にたいして、イエス様が「神の国について語った」とあります。神の国とは、神の支配です。神が、今、支配しておられる。神は生きて働いておられ、恵みをもって支配しておられる。その神の国がここにあることの証の一つとして病気の癒しが行われました。

神の国を宣べ伝えるとは、人間の理想を語ったり、論じたりする事でも、講義をすることでもありません。主イエスがすでにそうして来られたような事をするのです。つまり、「神の国はあなたがたの所に、すでに来ている。イエス・キリストを信じる事によって、神の支配の内に生きることができる」と、今、自分自身に起こっている現実を告げることなのです。

### 3 神の国のあり方

私たちのありようとは全く関係なく、神の一方的な恵みによって、私たちは神の国の中に生かされることができるからです。私はこの件についてある思い出があります。洗礼を受けて一年ほどたった頃。日曜礼拝の時、前の列に座った大学生が礼拝の間、ずっと携帯電話をいじっているのが目に留まりました。私はその人が気になって仕方なく、礼拝に集中できませんでしたが、その人と話したことも殆どなかったのも、いきなり注意することなどできません。迷った挙句、牧師夫人に「〇〇さんは礼拝の間中、携帯をいじっていた。注意してほしい」とまあ、ありていに言えば、「ちくった」わけです。その方は子供の頃から教会学校に通っていて、教会で育ったような人。が、大学に入ると殆ど礼拝にはこなくなり、たまに来て寝るか携帯をいじっているばかりいるのです。洗礼を受けたばかりの私は、「なんだこいつ、けしからん！」となったわけです。

私の話しを聞いた牧師夫人は「そうですか。折を見て言っておきますね。」と答えました。しかし、「でもね、洋子さん」牧師夫人は私をじっと見て言葉を続けます。「私ね、神様の恵みって、礼拝の間中、シャワーのように降り注いでいると想うの。私たちがどんな状況でもね。」その時、私は神のご支配について大切なことに気づかされました。「神とは、私たちのあり方に全く関係なく、私たちを超えて、遥かに大きく寛大なお方なのだ。そしてその愛のうちに私たちを捉えてくださるのだ」と気づかされたのです。考えてみれば、私たちは、いつもいつも神様の方を向き、神様のことに集中できているわけではありません。様々な想いを抱いてここに集ってくるのです。時には体調が悪い時もある、のっぴきならない心配事に心がいっぱいになる、囚われる事もある。いつもいつも「神さま、あなたを愛しています。あなたを礼拝します」という気持ちでいられるわけではありません。それが私たち人間の現実です。しかし、そんな私たち

の現実にも拘らず、私たちのあり方を超えて神の恵みの支配は私たちの所に来ている。私たちはありのままで神の愛の内に生かされている…それが神の国であり、使徒達が宣べ伝えたことでありました。

#### 4 ヘロデ

そんな主イエスが使徒達を用いてなされた神の国の宣べ伝えに、誰よりも驚き、誰よりも慌て、戸惑ったのは領主ヘロデでした。クリスマスの幼児殺しで有名なヘロデ大王の息子、ヘロデ・アンティパス、この世の支配者です。彼はローマの権力に服従し、ガリラヤの領主となっていました。政治家としての才能はなかったようで、民衆もヘロデを嫌っていました。イエス様が宣教していたガリラヤはそんなヘロデの領土でした。彼は、このガリラヤ地方は自分が思うとおりになる世界だと思い込んでいます。自分の気にいったことだけが行われなくてはならない。ところがそこに、自分の力が及ばないこと、把握できないことを行う男が現れました。自分の支配の外に立っている者がいる。それが、この領主ヘロデを戸惑わせたのでしょうか。少し前にも、自分の思うとおりにならない男がいました。洗礼者ヨハネです。けれどもヘロデはこのヨハネをさっさと捕まえて首をはねました。それなのに、別の男が、ヨハネよりももっとすごいことをしている。ヘロデはいったいこの男は何者なのだ？といぶかりつつ、イエスに会ってみたいと思ったようです。

このエピソードには続きがあります。ルカ福音書の23:6以降です。主イエスが十字架にかけられる直前、ローマ総督ポンテオ・ピラトは、イエス様を訴える祭司長や長老達をもてあましています。この男には死刑に当たる罪は見当たらないのに、ユダヤ人指導者達は「是非とも死刑にしてください」とうるさいのです。どうしたものか？だから、イエスがガリラヤ出身と聞きつけると、ピラトは喜んでヘロデのもとへとイエスを送りつけます。ヘロデの望みは達せられます。ですが、その時、イエス様は奇跡を自由自在に行う者としてではなく、囚われ人として縛り上げられヘロデの前に立ったのです。そして、彼の期待に反して奇跡を全く行いませんでした。ですが、ヘロデはそのことにホットしたのではないのでしょうか。「この男もわたしの手の内に入った。こんな無力な男のことを、どうして長い間、不安に思っていたんだらう。」と。だからこそ、この時、彼は部下と共にイエスを心ゆくまでいたぶり、いじめ抜きました。ヘロデには、私たち人間の心の闇が詰まっているように思います。神の支配のうちに生きるのなんてまっぴらだ、自分を王として、王女として生きたい…自分の欲望という檻に閉じ込められた私たち人間の姿があります。神の国に生きることができず、自分の国という闇が支配する所に生きる人間の姿です。その闇が、私どもの闇が、神の御子を十字架に付けるのです。

#### 5 使徒の帰還

さて、使徒達は宣教旅行から帰ってきました。イエス様の名代、代理人としての役割を彼らは果たしたのです。10節は、喜び勇んでイエス先生のもとに戻ってくる十二人の姿が目につかぶような一文です。「使徒たちは帰って来て、自分たちの行ったことをみなイエスに告げた。」この「告げた」という単語は、「物語りを語る」という意味のあります。われさきに自分たちが行った伝道の成果を、イエス様に報告し喜ぶ十二人がいます。

## 6 ベトサイダに退く

主イエスは彼らのそんな様子を見て、使徒達だけを連れてベトサイダという町に退去したとあります。ベトサイダとは、ガリラヤ湖の北岸に位置する町ですが、ヘロデの領土ではなく、彼の兄弟のフィリッポスが領主だったようです。どうして、主イエスは使徒達だけを連れてベトサイダに退いたのでしょうか。主は、自分を捕らえようとするヘロデの動きを察知し、いち早く彼の領土を脱出してベトサイダに移ったのかもしれない。

## 7 主イエスは優れた教師

しかし、ヘロデから逃れるのが、ベトサイダに退いた主な要因ではなく、別の大きな理由があると考えます。それは、主イエスが非常に優れた教師であるからです。使徒達は、伝道旅行の成功を大いに喜んでいました。世間の人々も使徒の行いを称賛し、誉めそやしていたことでしょう。しかし、そんな時こそ最も危ない時です。なすべきことが成功し、人から称賛される時こそ、私たちは神から離れてしまいがちだからです。「この称賛は自分の力のせいだ」と勘違いし傲慢になってしまう、そんな危険がいつもあるのです。だから、主イエスは、人里離れた寂しい所で、主と使徒達だけになる必要がある！とお考えになったのです。神のことをよく知らずに、使徒達を口々にもてはやす人々から離れる必要があったからです。弟子達の弱さを主イエスは十分にご存知でした。人々から離れ、静まり、神と向き合い、徹底して祈り、神が確かに働かれて、恵みの業をなしてくださったことを確認し、神の恵みを心に刻むことこそ、使徒達には必要でした。それこそ、まことに彼らに力を与えるものだからです。

それは、現代を生きる私たちも同じです。教会に仕えていると、様々に恵みの出来事と出会います。時には、いろんな人から称賛されることもあります。ですが、それは私どもの力というよりは、キリスト・イエスが働かれた結果です。私どもを用いて、父なる神が、キリスト・イエスが働いてくださった結果。私どもは傲慢になってはなりません。だからこそ、大きな恵みを経験した後は、人から離れて、一人で神のみ前に出て静まる必要があるのです。

## 8 追ってくる群衆

ですが、そんな主イエスの思いは、群衆によって遮られます。主イエスを慕って追ってくる人々が大勢いたのです。彼らは、主イエスを切実に必要としていました。そして、主イエスは、そんな人々を決して拒まれません。主はとても臨機応変な方です。自分の計画に固執せず、最も大切なことを選び取るお方だとわかります。主は、自分を追ってきた人々に、神の恵みの支配がやってきていることを告げられ、病に苦しむ人と向き合い、手をあて、その苦しみを共にして、癒されました。主イエスは、この業を延々と続けておられたのでしょうか。高かった太陽が西に傾き始めます。

## 9 弟子達の焦り

日が陰り出す気配に、十二人は焦り始めます。あたりは人里離れた場所。そこに男だけで五千人がいたのです。人数を数える時、成人男子だけ数えるのは当時の風習です。家の代表者ともとれます。男が五千人というのは、五千家族いたとも受け取られます。「五千家族もの人々、夕食はどうするのか？空腹の群衆がパニックにならないだろうか。早く解散させないと、大変なことになる。」十二人の使徒達がそう考えるのも、人間として当たり前です。ですが、彼らは主イエスの力を見くびっていました。伝道旅行の成功が彼らを少し慢心させていたのかもしれない。

そんな彼らに主イエスは、「あなた方が彼らに食べ物を与えなさい」とおっしゃいます。「まあ、なんと無理なことを！ 私たちには五つのパンと二匹の魚しかないではありませんか！」十二人の戸惑いもわかります。五つのパンと二匹の魚は、ふたり分の質素な食事であったろうと言われています。とても、五千家族のお腹を満たすことはできません。

## 10 主イエスの祝福

混乱する使徒達に向かって、主イエスは人々を五十人の組みにして座らせます。これも面白いのです。家族ごとではないのです。いろんな人々を、家族を一緒にして、五十人。相互に語り合いながら食事ができる人数の上限でしょう。富んだ者、貧しい者、知的階級の者、そうでない者、背景の異なる人々がみな平等に共に食卓に連なるために座る。そうして、平和のうちに、一緒に食事をして、語り合う。

しかし、それだけではありません。食事を与えてくださるのは、主イエス、給仕をするのは、主イエスの代理人である12人。神の国では、指導者達が、みなに仕える者なのです。人間の世界とはまるで異なるのです。

## 11 食糧を祝福する

そして、主イエスの手元には、十二人がもっていたわずかな食糧、たったふたり分の食糧、五つのパンと二匹の魚をとって天を仰いで、それらのために賛美の祈りを唱えた…とあります。16節です。この「賛美の祈りを唱え」という部分ですが、「祝福する」と訳すことができる言葉です。

「祝福する」とはどういう意味があるのでしょうか。それは“生命の創り主である神から「生命の力」を与えられる事”だと言われています。聖書の神は全く何もない状態から、この全宇宙と、そこに生きる全てのものを造り出したお方、創造主だからです。その生命を作り出す力をどうぞこのパンと魚に働かせてください、そしてここにいる人々の空腹を満たしてください…と主イエスは、天の父なる神に祈られたのです。その時、神の創造の力が働き、五千家族は養われました。まさに神の国とは、私たちが神の力に完全により頼む時、私たちの間にたち現れるものであるとわかります。

## 12 肉の糧を得る

これは荒唐無稽なお伽話でしょうか。二千年前の古代人には通用しても現代を生きる我々には無関係でしょうか。いえ、神はいつも私たち人間には捉えきれないもの、不思議なことをなさるお方です。神様により頼んでなすべきことをなしていると、経済的な危機から救われた話しは、教会ではよく聞きます。神様は、私たちを霊的に豊かにしてくださるだけでなく、私たちの肉体をも養って下さるのです。食物を与えられることで、神様が実際に働いてくださっていることがわかり、霊的にも豊かにされます。霊的に豊かであるからこそ、神様の助けを知ることができ、肉の糧を豊かに頂くことができます。そうして私たちは全体的に神の国の一員とされるのです。神の国とは、頭の中にあるのではなく、極めて現実的なのであります。

## 13 弟子達の喜び

五千家族が養われたベトサイダ郊外の人里離れた草原。傾く春の日差しの中、人々の笑顔で溢れていました。喜びが満ちていました。それは、自分たちの幸運を喜ぶ喜びではありません。神の恵みの支配を喜ぶ喜びです。神の国の喜びであります。そのなかでも使徒達の喜びは、格別なものがあつたと思われまゝ。主イエスは、黙々と人々のためにパンや魚を裂いて、弟子達に手渡されます。弟子達は、それぞれ籠をもって、その主イエスのそば近くに立ち、主イエスから裂かれたパンや魚を受け取り、それを籠に入れて、人々に配るのです。やがて、食べ終わった人々のもとにあるパンの欠片を籠に入れてもらおう。そうすると十二人全員の籠がいっぱいになった！

「その時の弟子達の喜びと驚きに満ちた顔を私は見てみたい」とある牧師はいいました。私も見てみたいと思います。自分たちの力を遥かに超える圧倒的な恵みを見た時、弟子達の顔は、想像するだけで楽しくなります。

#### 14 私たちのもっているほんの僅かなものを

私たちのもっているものも、神の恵みに比べれば、ほんの僅かなもの、五つのパンと二匹の魚程度です。それもまた神に与えられたものではありませんが、私たちの力では、僅かなもので多くの人々を養うことはできません。肉体的にも、霊的にもです。しかし、主イエスは、父なる神は、そんな、ほんの僅かなものでも、考えられないくらいに大きなものにしてくださるのです。それを信じて、私たちは主イエスの言いつけ通りに働きます。主イエスの真似をして働きます。人々を愛し、人々に奉仕するのです。相手の状況や態度など全く関係なくです。これこそ、教会の姿であります。

実はこの姿を先週の日曜日の午後ユーオーディアのコンサートで私は見つけることができました。先々週から色々なことが続けて起こっているので、私は不安でした。「他の教会に比べたら、うちの教会は人数が少ない。この教会で来場して下さった方々を十分にもてなすことができるのだろうか」

ですが、私の心配は杞憂でした。教会の皆さん一人一人、率先して本当によく奉仕してくださいました。間の休憩時間、会堂から集会室を眺めてびっくりしました。教会員以外の方々がテーブルについてお茶を飲んだり、お菓子を食べながら和気あいあいと自分の家にいるようにくつろいでおられたからです。その間を教会員さん達が嬉しそうにお茶を給仕したり、話し相手になっている…ああ、五千人の供食のシーンに似ているなあ…と思いました。

私たちが神の豊かな愛のうちに生きる時、イエス様は、私たちの持っているほんの僅かなものを豊か増やして用いてくださるのだと確信しました。特別なことをする必要はないのです。自分独自の事をする必要もありません。ただ、主イエスの後に続いて、主イエスの真似をして、教会に集まる人々に奉仕するのです。給仕になるのです。

誰よりも支配者として立つ資格がお有りの方、主イエスが、率先して給仕として立っておられるからです。そして、人々に仕えることを通じて、神のご支配を実現されるのです。主は繰り返しおっしゃいます。「私は仕えるために来た、私は仕えるために来た」と。神の支配は、神の御子が人々に仕える所に現れました。

そして主イエスと共に仕える弟子達の所にも、神のご支配が現れるのです。神が私どもを愛してくださるということがそこに見えるからです。それが私どもが宣べ伝える神の国です。ヘロデのように「自分の王国」という檻の中で、惨めに滅んでいくしかなかった者達が、主イエスによって神の国のために共に働く

者とされるとは。まさに五つのパンと二匹の魚で五千家族を養った奇跡と言えるでしょう。

主イエスが今も教会に、私どもに給仕をしてくださっているから。私どもに仕えて頂いているからこそ、私たちは、途方もなく豊かにされ、主と共に働く者とされるのです。そして、この会堂に来てくださった全ての人を心から迎えるのです。眠っていても、携帯をいじっていても。そのような方にも主が仕えてくださるから。そして、主は、神の恵みの支配の中で生き、そして死ぬ、いや、死を突き抜けて生きることの素晴らしさを、共に働く私どもに教えてくださいます。主イエスと共に働くこの歩みを、神の民、横浜ナザレン教会の皆さんと共に続けていきたいと祈る次第です。